

I 糖業の概況

1 海外の動向

(1) 世界の砂糖需給の概況

2009/10年度における世界の砂糖生産量は1億6,250万トン(前年度比7.6%増)となり、前年度からかなりの程度増加した。中国、タイは干ばつの影響により減産となったが、世界最大の生産国のブラジルは、大雨の影響で当初の予測は下回ったものの過去最高を記録した。同国に次ぐ生産国のインドは、モンスーン期の干ばつによる生産低迷が懸念されたが、その後の天候回復によりさとうきびの生産が前年度から大幅に増加した。また、EUではビートの豊作により生産量は増加した。

一方、同年度の世界の砂糖消費量は、前年度からわずかに増加の1億6,300万トン(前年度比1.3%増)となった。人口増加と経済発展に伴う途上国の所得向上が消費量増加の主な要因とされる。

こうした結果、世界の砂糖需給は前年度に引き続き消費量が生産量を上回り、期末在庫率(期末在庫量/消費量×100)は24.5%と過去10年間で最低の水準となった。

※1. データは平成22年7月現在、農畜産業振興機構委託調査会社 LMC International Ltd. の推計による。

※2. 年度は国際砂糖年度(10月～翌9月)、砂糖の数値は粗糖換算。

(2) 国際砂糖価格の推移

ニューヨーク粗糖相場(期近)の2009年4月～2010年3月の動きを見ると、4月の月平均価格は1ポンド当たり13.12セントであったが、5月頃から世界最大の消費国で世界第2位の生産国でもあるインドがモンスーン期の干ばつに見舞われ、輸入量が大幅に増加すると見込まれたことから、相場は上昇基調で推移した。さらに、7月に入ると、世界最大の砂糖生産・輸出国のブラジルで大雨によるさとうきび収穫の遅れから、砂糖生産が伸び悩むとの観測が流れた。

こうした状況の中、ロシア、インドネシア、中国など輸入国の消費量が堅調に推移したこともあり、世界的に砂糖需給がひっ迫するとの観測が強まった。その結果、投機資金の流入も加わり、相場の上昇基調に拍車がかかり、1月の月平均価格は1ポンド当たり28.38セントまで高騰し、2月1日には一時29年ぶりの高値となる同30.40セントに達した。その後、米国の新金融規制やギリシャの財政問題など世界経済の先行き不透明感から投機資金が引き上げられたことや、価格高騰で需要家が取引姿勢を弱めたこと、ブラジル産砂糖の供給が潤沢との観測が出されたことなどから、相場は急落した。さらに、3月下旬には、インドの砂糖生産量見込みが、降雨によるさとうきび生産量の回復を受け上方修正され、世界の砂糖需給は当初予測されたほどひっ迫しないとの見方が広がり、3月の月平均価格は

1 ポンド当たり 19.26 セントに落ち着いた。

2 国内の動向

(1) 砂糖類概況

平成 20 年産の甘味資源作物の国内生産量は、てん菜については単収が下がり、総収量は 424 万 8 千トンと前年度を下回った。また、産糖量は、作付面積が前年産に比べ減少したものの、登熟期の順調な天候が生育を促したことから、産糖量は 72 万 5 千トンと前年産を上回った。

一方、さとうきびは、収穫面積は前年産並みとなったものの、台風被害に見舞われた一部地域を除き、総じて天候に恵まれ生育が順調に推移したことから、総収量が 159 万 7 千トン、分みつ糖分の収量が 153 万 7 千トン、産糖量が 19 万 6 千トン（分みつ糖分）と、それぞれ前年産を上回った。

砂糖の消費量は、平成 18 砂糖年度以降はわずかながら前年度を上回っていたが、平成 20 砂糖年度は前年度比 2.8% 減の 213 万 6 千トンとなった。

加糖調製品の輸入状況（21 年 4 月～22 年 3 月）は、「ココア調製品」が前年度比 1.4%、「コーヒー調製品」が同 222.8%、「粉乳調製品」が同 11.2%、「ソルビトール調製品」が同 2.4%、「その他の調製品（ソルビトール調製品を含まない）」が同 8.0%と、それぞれ増加した。一方、「調製した豆」は前年度比 5.2% 減少した。この結果、これらの品目全体では、前年度比 3.8% 増加の 44 万 7 千トンとなった。

異性化糖の移出数量（21 年 4 月～22 年 3 月標準異性化糖換算）の動向は、4 月から 12 月にわたって前年同月を下回り、第 1 四半期は前年同期比 2.0% の減少、第 2 四半期は同 11.4% の減少、第 3 四半期は同 3.2% の減少となった。第 4 四半期は、1 月が前年同月を 1.2% 上回ったが、2 月、3 月と前年を下回り、前年同期比 3.1% 減少となった。

この結果、21 年度の移出数量は前年度比 6.0% 減少の 77 万トンとなった。

(2) 砂糖類の国内価格の推移

砂糖の日経相場（東京）上白大袋の価格（21 年 4 月～22 年 3 月）は、粗糖の国際価格の高騰を受け、精製糖企業各社が 8 月出荷分から建値（特約店に対する出荷価格）を 4%（1 キログラム当たり 6 円）引き上げたことに伴い、1 キログラム当たり 169～170 円となり、10 月までこの水準で推移した。その後、精製糖企業各社は、国際価格のさらなる上昇を受け、11 月中旬出荷分から再び建値を 5 円引き上げたことから同 174～175 円となり、2 月までこの水準で推移した。しかし、これら 2 回の建値引き上げにもかかわらず採算割れの状況は続いたことから、精製糖企業は 3 月に入ると 3 度目の建値 8 円の引き上げを行い、その後は同 182～183 円となった。

一方、異性化糖の大口需要家向け価格（21 年 4 月～22 年 3 月果糖分 55%、東京・タンクローリーもの）は、原料とうもろこしの国際価格が昨年末から安値に転じ、平成 21 年 4 月下旬に日経相場が 1 キログラム当たり 5 円下げたことから、1 キログラム当たり 121 円～125 円となり、11 月中旬まで

この水準で推移した。その後、原料とうもろこしの国際価格の安値傾向は続き、11月下旬に入ると日経相場が同5円下げたことから、同116円～120円となった。

3 国内産糖の生産動向

(1) てん菜糖

① てん菜の生産

平成 21 年産てん菜の作付面積は前年産比 1,528ha 減の 6 万 4,442ha、栽培農家戸数は前年産比 275 戸減の 8,855 戸、1 戸当たりの作付面積は前年産比 0.05ha 増の 7.28ha となった。

北海道平均の 1 ha 当たりの収量は 56.6 トン（前年産 64.4 トン）、総収量は 364 万 9,000 トン（前年産 424 万 8,000 トン）と平年をかなり下回る低収となった。一方、根中糖分は 17.8%（前年産 17.4%）と平年よりも高い糖分となった。

② てん菜の生育概況

てん菜の植付け開始は、天候の影響で平年より 1 日遅く、最盛期は平年より 2 日遅れとなった。

生育初期においては、移植後の活着も比較的良好で推移したが、5 月中旬に十勝地方を中心に風害が発生し、直播栽培では再播種が行われた圃場もあった。6 月下旬には北見市と大空町の一部で降雹による被害が発生し、生育への影響が懸念されたが、早期に茎葉が回復したことにより影響は最小限にとどまった。6 月中旬は低温であったが、下旬が好天に恵まれたため、7 月の生育状況は、おおむね平均並みとなった。また、7 月は低温・寡照・多雨の影響で、一部圃場では停滞水による湿害の発生がみられた。8 月以降もやや低温に推移し、9 月の生育状況は、全道平均で 2 日遅れとなり、十勝地方では 4 日遅れとなった。

病害虫については、8 月上旬は褐斑病の発生が平年よりやや多く、被害拡大が懸念されたが、その後やや低温に推移したことから、最終的な発生は平年よりやや少なかった。しかしながら、上川管内や後志管内の一部圃場では発生も目立ったところもあったことから、適期防除が行えなかった影響があったものと思われる。その他の病害虫については、そう根病はやや少なく、根腐病・ヨトウガの発生量は平年並みであった。

③ てん菜糖の生産

21 年産の産糖量は、産糖歩留が 17.03%（前年産 17.06%）と前年並みになったものの、1 ha 当たりの収量が前年と比べ低収量となったため、63 万 9,946 トン（前年産 72 万 4,932 トン）となった。このうち、てん菜原料糖は 18 万 8,496 トン（前年産 27 万 4,232 トン）で総産糖量に対する割合は 29.5%（前年産 37.8%）となった。

(2) 甘しゅ糖～鹿児島県産～

① さとうきびの生産

21 年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より 520ha(5.3%)増加し 1 万 282ha となった。

作型別割合では、株出 62.0%（前年産 60.5%）、春植え 22.2%（同 22.2%）、夏植え 15.8%（同 17.4%）となっている。

10 a 当たりの収量は、前年実績より 1,152 kg (15.7%) 減少し 6,171 kg となった。地域別では、種子島が 192kg (2.5%) 増加し 7,870kg となったが、その他の地域はすべて減少となった。特に、徳之島が 1,878 kg (26.2%) 減少の 5,288 kg、沖永良部島が 1,846 kg (24.3%) 減少の 5,763 kg、与論島が 1,164 kg (17.7%) 減少の 5,414

kgとなった。このため、さとうきびの生産量は前年より8万430トン（11.3%）減少し、63万4,451トンとなった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より80戸（0.9%）増加の9,337戸となった。

② さとうきびの生育概況

ア 生育初期（3月～5月）

日照時間は平年を上回ったが、気温、降水量が平年を下回ったため、生育はやや遅れた。

イ 生育旺盛期（6月～9月）

種子島では、気温が平年並みからやや高く推移し、降水量は平年より少なく推移した。生育は少雨の影響で伸びが鈍化していたが、7月後半の降雨により平年並みまで回復した。

大島地域では、7月から9月にかけて降水量が平年より大幅に下回り、干ばつの被害を受けたため、生育旺盛期の成長が伸び悩んだ。

ウ 生育後期（10月～収穫期）

10月以降の降水量は平年を大きく上回り、サトウキビが再成長したため、品質低下を招いた。

③ 甘しゅ糖の生産

分みつ糖の歩留りは、前年実績より0.5ポイント下回り11.87%、含みつ糖の歩留りは、前年実績より0.7ポイント下回り11.20%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より1万2,900トン（14.7%）減少し7万4,724トン、含みつ糖は、前年実績より278トン（34.4%）減少し531トンとなった。

(3) 甘しゅ糖～沖縄県産～

① さとうきびの生産

21年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より341ha（2.7%）増加し1万2,747haとなった。地域別では、沖縄地域が199ha（2.9%）増加、宮古地域が37ha（0.9%）増加、八重山地域では105ha（7.0%）増加した。

作型別割合では、夏植45.1%（前年産46.4%）、春植13.2%（同12.0%）、株出41.7%（同41.6%）となった。

10a当たりの収量は、前年実績より208kg（2.9%）減少し6,901kgとなった。地域別では、沖縄地域が1,329kg（19.2%）減少の5,597kg、宮古地域が944kg（12.1%）増加の8,778kg、八重山地域が1,989kg（32.8%）増加の8,051kgとなった。このため、さとうきびの生産量は、前年より2,279トン（0.3%）減少し87万9,657トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より162戸（0.9%）減少し1万7,249戸となった。

② さとうきびの生育概況

ア 生育初期（3月～5月）

各地域の月平均気温はおおむね平年並みとなった。

降水量は、3月は南大東地域、宮古地域では平年並みとなったが、石垣地域、与那国地域では平年を下回った。4月は本島地域、久米島において平年より少なく、5月は全地域において平年より少なく推移した。本島北部では、4月から5

月に気温が低く初期生育が緩慢となった。

イ 生育旺盛期（6月～9月）

月平均気温は各地域で平年よりやや高かった。降水量は、6月は与那国地域を除き、各地域とも平年より多かったが、7月から9月は宮古地域、与那国地域を除き、平年よりも少なかった。日照時間は各地でおおむね平年より多かった。

宮古地域では8月末から9月にかけて少雨だったため、夏植新植で発芽不良が見られた。本島北部では9月まで干ばつが続き、茎伸長が抑えられた。八重山地域では7月、9月の降水量が平年を下回り、干ばつ傾向となり生育が抑えられた。

ウ 生育後期（10月～収穫期）

月平均気温は各地域とも平年より高い状態が続いた。降水量の10月はほとんどの地域で平年よりも多かった。

10月上旬に台風18号、中旬に台風20号が南北大東島に襲来し、折損、倒伏、葉片裂傷の被害が生じた。

③ 甘しゅ糖の生産

分みつ糖の歩留りは、前年実績より0.52ポイント下回り12.45%、含みつ糖の歩留りは前年実績より0.79ポイント下回り14.33%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より6,473トン(6.0%)減少し10万1,056トン、含みつ糖は前年実績より1,681トン(20.9%)増加して9,717トンとなった。